もしも冨岡義勇が嫌われる理由を知っていたら。

聖獅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※　冨岡義勇の性格が多少変貌しておりますので、苦手な方はご遠慮下さい。

他、原作では触れられていない面も筆者の想像で改変している所があるのでご注意ください。

竈門禰豆子（かまどねずこ）の〝禰豆子の「禰」は「ネ」＋「爾」が原作での表記となります。〟

鬼滅の刃、何回も見返すと新たな発見があり、面白いなぁと。

本当は最終決戦まで書いてから投稿しようと思ったのですが、とりあえず少しずつでもと。

目次

3　12

2　5

1　1

1

柱合会議が終わり、それぞれの面々は思い思いに去っていき、その帰りの道中で。
「冨岡さん、冨岡さん」
胡蝶しのぶが冨岡義勇に近づき、イタズラにつつく。
「げつ…胡蝶…」
義勇はいつもの抑揚の無い声で悪態をつく。
「まぁ!?げつ?とは何ですか?酷ゐですよ、冨岡さん?」
「……」
「なんとか云つたらだうなんですか?そんなんだから皆んなから嫌われるんですよ?」
「……さうだらうな」
……大正辺りの仮名遣い、文書に書く場合の文体はそうですが実際の話言葉は現代に近いものと思われます。
ここから現代仮名遣いに戻します。

「おや?自覚がおありだったんですね?でしたら、改めて下さい!」
「……」
「まずは先程の失礼な物言いからです!私は怒っています」
「そうか……」
「そうか……じゃありません!嫌われている理由がお分かりなら、直して下さい!」
「断る」
「まぁ…!もう冨岡さんの事なんか知りません!」
「……待て、胡蝶」
「何ですか?嫌われ者の冨岡さんとは3日間、口を聞いてあげません!笑顔も見せてあげません!」
「自分の身を犠牲にするな…」
「……なんの事ですか?」

「俺達鬼殺隊はいつ鬼との戦いで死ぬか分からん。だが、死ぬつもりで生きようとするな」
「何を言っているのですか…本当に？」
「……知らないとでも思っているのか？これ以上体を蝕ませるな、もう止めろ。腕も鈍っているぞ…お前の姉の仇の事は……。気持ちは分かるが復讐に心を囚われるな」
「……」
「後、怒ると小皺が増えるぞ」
「!?もう本当に知りません！」
しのぶは怒りが振り撒きながら、義勇を置いて去っていった。
その後ろ姿を義勇はしばらくの間、見つめた。
しのぶは心の中で呟く。
……秘密にしていたのに…困った人ですね……そんなんだから、嫌われるんですよ……

決戦に向けて柱同士の稽古にも取り組み、冨岡は不死川と対決…もとい稽古をしている所に、炭治郎が決闘と勘違いし仲裁に入る。だが、炭治郎は得意の嗅覚で不死川の好物を当てた事により、怒り心頭の照れ隠し（？）で彼に殴り飛ばされて、しばらく後に目を覚ます。
目を覚ました炭治郎に冨岡は念押しで確認する。
「なに？不死川はおはぎが好きなのか？」
「はい、不死川さんが稽古戻ってくる度におはぎの良い匂いがしました！」

「そうか……くくく……」
「冨岡さん？」
「よし、おはぎはつぶあんとこしあん…やはり、こしあんに限るな！不死川も恐らく、こしあんだな。そうに違いない」
「え？…そ…そうですね」
炭治郎は不死川はつぶあん派な気がしたが、何故かやる気を出して

いる冨岡に水を指さないように敢えて黙った。
後日。
不死川の住まいに訪問する冨岡と炭治郎。
「不死川！」
「なんだぁ冨岡、ああ？」
「おはぎだ、受け取れ。勿論お前もこしあんだな？」
「俺も一緒に作りました！」
「……」
「炭治郎から、不死川はおはぎが好きだと聞いてな」
「ええ、不死川さん。いつもおはぎの良い匂いがしたので、間違い無いですよね？」
「そういう事だ、不死川。自分に素直になる事は大事だぞ……ぶふっ…」
「冨岡さん？今笑いました？」
「……ああ……テメェ、冨岡……鬼を狩る前にテメェとここで決着を付けてやるぜ…」
「ええ!?な、なんで!?怒るんですか!?と、冨岡さんも危ないですから、逃げて……、ええ？もう居ないいいいいい!!」
「待てこらっぁあああああ！ぶっ殺してやらあああああ!!」
「ふ、二人とも速いいいいい!!」

慌てる炭治郎を置き去りに、２人は走り出す。
冨岡は懐に忍ばせたおはぎを食べながら、不死川からの猛追を凌いでいる。
「もぐもごごごもごごっご！」
「何喋ってるか分かるかぁあ!!あと食べながら走るんじゃねええ、冨岡あああああ!!」
不死川の住居を抜け出し、他の柱達の行動範囲内にまで及ぶ。
所用で胡蝶しのぶは悲鳴嶼行冥と道端で雑談していると、目の前を彼らが走り去っていく。
「ん？……冨岡さん？それに不死川さんも？」

しのぶも速さに自信はあったが、その2人の速さには目を見張った……それよりも殺気立った不死川に驚き、十中八九また冨岡が怒らせたのだろうと察すると頭痛を覚えた。
「はぁ……悲鳴嶼さん、2人を止めないと！」
悲鳴嶼は両手に下げた数珠を合わせて鳴らし、
「……案ずるな、しのぶ。あの不死川の殺気は本気では無い。童達が互いに駆けっこしているのと同じだ……」
「……そうですか？悲鳴嶼さんがそう仰るなら……」
「……ただ、不死川のあれは8割程本気だ」
胡蝶は再び溜息した。

2

時透無一郎が彼の道場で、隊士達に稽古を付けていた。
「皆全然駄目だね、僕より年上なのにその程度なの？悔しかったら一本取ってみなよ」
彼は経験では無い類稀な才能で、それなりに死線を潜り抜け且つ背丈も年も上の隊士達を叱りつける。
彼らも相手は上官の柱とはいえ、内心気分の良いものではない。自身の尊厳を傷つけながらも鬼を倒す為という大義の為には自身のそれを押し殺し、強くなる為に精進する。
そんな時、道場の換気の為に開けられた窓から静かに冨岡義勇が侵入してくる。
その場の一同が驚く前に次の瞬間、
ドゴン！
轟音と共に不死川実弥が木刀一突きで道場の板壁に穴を開けた後、鉄山靠の要領で自分の大きさ程の穴を更に広げ破壊する。
二人の登場に隊士達は驚愕し、無一郎は呆れて不動になる。
「冨岡ぁああ!!てめぇ、今度はわさび入れやがって、今日と言う今日はぜってぇゆるさねぇ、命日にしてやるぞおお、覚悟しやがれ！」
「心外だ・・・新たな味への挑戦だ・・・スイカにも塩をふるだろう？あれと同じだ」
「・・・ああ？中身全部わさびにしやがる馬鹿野郎が何処に居やがる!!」
「・・・・・・・」
「何とか言いやがれ!!」
「加減を間違えた」
「・・・死にやがれぇぇぇ!!!」

風の呼吸　玖の型　韋駄天台風
実弥は道場天井まで一瞬で跳躍し、冨岡に向けて無数の大小の様々な螺旋、竜巻の如き斬撃、更にそこからかまいたちを派生させ、空気を切り裂き、真剣程の斬れ味は鋭く無くとも当たれば怪我では済まな

い。
・・やれやれ、頭に血が上って周りへの被害も気にしていないな・・・その事を一瞬の内に思考した後、
水の呼吸　拾壱の型　凪　大海
震え上がっている隊士達を後ろにし、通常の凪よりも広範囲・・・伊黒の柔軟性や伊之助の関節外しを応用する等で可動域を広げ、刹那の速さで木刀を広範囲に振るいそれらの攻撃を迎撃する。
離れた場所でそれまで関心を示さなかったが無一郎が瞠目している。その余りの速さの斬撃に。
だがそれでも、全てを迎撃しきれず道場内周辺に傷が付く。
「・・・お前達、怪我は無いか？」
「と・・・冨岡さん・・・」
隊士達は今の実弥の技をまともに喰らえば、半殺しにはなるだろうと自覚し、半泣き状態になっていた。
技を出し、着地した実弥は忌々しげに言い放つ。
「・・・面白れぇ、本来の柱稽古になってきたじゃねぇか・・・？お前ら！冨岡の影に隠れやがって、それで鬼を斬れんのか？ああ？」

隊士達は彼の気迫に心底震え上がり、謝り倒す。
「冨岡！楽しくなってきたな？俺達との違いをもっと見せてみろ、今度は手加減しねぇぞ！」
「いや、今のは本気だっただろ？・・・あと用事を思い出した・・・さらばだ」
そう言い捨てて、入って来た窓とは逆側から逃走する。
実弥も再び逆側の板壁をぶち壊し、追跡を再開する。
隊士達の誰ともなしに言う。
「あの人達・・・出入り口あるの知らないのかな・・・」
「・・・何しているの皆？呑気な事言ってないで、空いた穴塞いでよ。今日はそれが終わらない限り誰も帰さないよ。」
無一郎の無慈悲な言葉により、彼らの悲痛な叫びを冨岡は聞こえた気がした。

炭次郎や伊之助、善逸といった身体能力に優れた者達ならある程度のコツを掴むか、遮二無二していれば無意識により良い解を自分達で見つけ出して成長していく。だが、世の中そういう人間ばかりでは無い。

過酷な環境で無意識に、より良い生き延びる身体の動かし方を見つけた天才、元忍び、宇髄天元。彼は先の上弦の鬼との闘いで片目片腕を失い、前線での闘いから退き、隊士達への指導に当たっていた。

竹刀片手に罵声が飛ぶに飛ぶ。

「遅い遅い！お前らナメクジかよ！走るなんざ単純な事も出来ないのか!?上弦の鬼に勝てると本気で思っているのか、これで!?なぁおい！」

苦しさで倒れた隊士を竹刀で叩き、しごきぬく。

そんな彼らに呆れて、

「たくっ、どうしようもねぇな。質が悪い！」

炭次郎達のように彼に匹敵する才能を持っていれば、気も合って来るが全員がそうではない。

「まぁ、そう言ってやるな。宇髄のようにはいかない」

冨岡が彼の後ろで両膝に両手を添えてしゃがみながら話しかけた。

「・・・!?どわあ！冨岡、お前いたのか!?・・・やるな。俺相手に気配を悟らせねェとはな・・・、・・・俺の背後とるなんざ派手な事しやがる割には、地味な座り方してんじゃねえよ！」

「そんな事よりも、並みの隊士達相手に、宇髄と同じやり方をしても仕方が無い」

「んん!?じゃあ、お前が俺の代わりにしごくのか？」

「いや、俺は忙しい！」

「ふざけんな!!」

一問答した後、冨岡は走るのにも技術が居る事、宇髄は無意識に行っている事、筋肉をただ酷使しただけでは余り成長せず、適度に休みその上で酷使し、また適度に休みを繰り返した方が成長する事。１

人1人には個人差があり、休む時間の長さを変えた方が良い等助言した。時には毎日練習した方が伸びる者もいるが、それは千差万別だとも告げた。
「はぁ～・・・お優しいこって・・・んな1人に合わせてばっかりだぁ、日が暮れるぞ。ある程度までは考慮するが、限界があるぞ」
「これだけ大勢いるからな、やむを得ないが・・・元忍びのあんたに言わせたら、今のあんたのやり方でも、お優しい事だろうな」
「・・・・・・・・」
僅かに空気が揺れる。
「お前・・・俺らの事調べたのか？」
「この大正の世でも、過酷な修行を課す忍びが居ると聞いた・・・最も表に出ないだけで似たような事をしている奴らも実は居るがな。忍びの目的が何かだ、過酷な訓練をする事が目的なのか、鬼を倒し1人でも多く生き延びる事が目的か、どれかだ。お前達の一族は政府に取り行って、俺達が子供の頃起きた露助（ロシア人への蔑称）との闘いには重宝されなかったのか？・・・それに今年も幾つもの国を巻き込んだ大戦さが起きている、俺達の国もまさか・・・まったく、鬼との闘いだけでも大変だと言うのにな・・・もしかしたら忍びの出番があるかもな、諜報部隊として・・・」
冨岡は露助という表現が蔑称とは認識していない、周りでそう言っていたので、それが普通の表現だと思っている。
彼ら鬼殺隊の屋台骨であり、御館様こと産屋敷耀哉は政府の有力者に金銭的な面で支援している・・・その事で本来は非公認の武装集団、鬼殺隊・・・公にはされていない彼らの存在の黙認、本来であれば政府管轄の軍隊でもない武装集団は警戒されても仕方がない・・・時には隊士達の日輪刀による帯刀などが見つかった場合も最終的には警察上層部で黙認にするように政府を通じ、圧力を掛けている。
そして、これだけの実力を持つ隊士達の徴兵制も見逃されている。
産屋敷耀哉は権力者・・・政府に一定の距離を置いており、我が子のように思う隊士達を人間同士の戦争に極力巻き込みたくないと口には出さないが考えている。

彼ら産屋敷家は代々先見の明が有り、商売繁盛している・・・ただ、その利益の中には戦争特需も含まれている・・・。
鬼を倒す為とはいえ、清い面だけでは無い産屋敷のその一面を知る者は、家族の一部の者と諜報で盗み得た冨岡義勇のみである。
「お前、今日はいつになく喋るなぁ・・・どうした?」
宇髄は話をはぐらかそうとする。
「そうか・・・お前の親か祖父たちは慶応の時、幕軍（徳川方）の味方をした・・・だから、今の政府から良く思われていない・・・それで、かなり無理のある訓練もして必死に雇って貰おうとしたのか・・・哀れだな。・・・未だに政府は幕軍の事を良く思っていないからな」
冨岡の推測に宇髄は肯定の言葉は言わなかったが・・・、
「だ―!・俺が生まれる前の話しなんざしらねぇよ!・じじいが薩長か徳川か・・・しらねぇよ・・・けっ、昔の事なんざ忘れたぜ」
彼はそれを肯定の意味で捉えた。
「たくっ・・・人の痛い所、ずけずけ突きやがって、だから嫌われんだぞお前」
「・・・お互い様だ、忍びのあの過酷な任務には、元々身分の低い者、罪人や捕虜がその任に就いたと俺は聞いている」（※あくまで一説です）
嫌われていると言われ、反射的に少し頭に来た冨岡は、違う反論・・・宇髄本人ではなく一族そのものへの反論をしてしまっている。
それを聞き、宇髄は少し驚いた。何故自分達がこんな過酷な訓練をしなくてはならなかったのか・・・その出発点が判ると多少納得した。
ああ、だからかと。俺が並みの隊士達よりも図抜けているのは元々、そういう過酷な境遇だった先人達の血反吐吐く苦労の末に手に入れた身体のおかげなんだと・・・
そう思うと、ほんの僅かだけあの冷酷無比な・・・自分の息子達に殺し合いをさせるような父親に本当に僅かだけ、自身にも受け継がれた才能と身体には感謝した。
「はぁ~なるほどな、もともとそんな感じだから人で無い扱いを受けたと・・・そんな人で無しな事して、任務の為には平気で無関係な奴

を殺したりもしたわけか・・・、ははは・・・冨岡、お互い様なんかじゃねぇ、あいつらにとっちゃ俺の方がよっぽど嫌われているだろうな・・・」
　敢えてあいつ等とは誰か言及せず冨岡もまた聞かなかったが、宇髄はその後彼に、俺達柱の中では、俺はお前よりは嫌われていないと追撃した。
　一しきり話が横に逸れた後、再び訓練の話に戻した。
「まぁ・・・そうだよな・・・ちっ、俺がこんなザマになって、少しばかりイライラしてたかもな・・・」
　そう言って宇髄は自身の片手で失った目の窪に触れる。
「・・・宇髄、あんたは本当はそれでもまだいる上弦と闘うつもりだっただろう」
「・・・・・・いいや、もうこの状態じゃ足手纏いになるからだ」
「嘘だな、忍びなら両手両足無くそうが噛みつくなり、闘う。妻が三人もいて、怖くなったな？」
　一瞬、宇髄は杭に打たれた顔になった。自分独り死ぬのは別に構わない。あの時、上弦の鬼の毒にやられ、その窮地を炭次郎の妹、鬼の？豆子に救われなければ、今この場におらず・・・あの瀕死の状態だった自分の周りで忍びらしくもなく、情に流され泣き叫んだ妻達・・・表面に出すか出さないかの違いで３人共号泣していた・・・。
　自分はもうそんな妻達の泣き顔は見たくない、そう思うと弱気になってしまった・・・。その辺りを冨岡に見透かされ・・・
「・・・ははは、ははは・・・。冨岡、お前普段何考えってか判らない所があったが、意外に助平なんだな。見直したぞ」
　そう言って茶化す。
「俺は助平ではない」
　彼はムキになって反論したのか、それとも同じく茶化して言っただけなのか表情からは判別しずらく・・・
「まぁ良い、お前も妻の一人や二人持てば・・・胡蝶や甘露寺を・・・いや、何でも無い」
　人としては同情出来るが、鬼殺隊には自分の恋人や人生の伴侶を殺

されて入隊した者もいる、自身が甘いというのも宇髄自身弁えている。
だが、冨岡は生まれが人間らしからぬ環境の宇髄が、鬼殺隊士としては甘くても人間らしい生き方に幾らかでも歩めたのであれば、それは黙認されても良い・・・他の柱達も何となくそう思っているだろうと感じた。
宇髄は改めて尋ねた。
「なぁ、お前暇なら一緒にそこでへばってやがる隊士達に稽古つけてくれるか？」
「すまないが、俺はこう見えても脛に傷持つ凶状持ちでな、一所（ひとつどころ）に落ち着けん。では御免」
冨岡はそう言って歩き去る。
てちてち、と謎の音を立てながら。
その後ろ姿に、宇髄は呟く。
「いや凶状持ち・・・？古・・・渋い事言うなぁ、お前。ははは、冗談も言うようになったん・・・ん？」
血相変えてこちらに向かってくる不死川を確認する。
「てんめぇ、此処にいやがったか！今度はからし入れやがって、ぜってぇ許さねぇ！てめぇのせいで俺の稽古が進まねぇだろうが！往生して潔く死にやがれえええ!!!」
冨岡は脱兎の如く走りだす、宇髄の前を不死川が走り去り、土煙を巻き起こす。
「げほげほ・・・いやぁ～若きは良いものだな～・・・おい、お前ら今の柱達の走り見ただろ！十分休憩は取れたな！とっとと走りやがれ！」
再び宇髄の威勢の良い罵声・・・叱咤が飛ぶが、彼は冨岡達よりも2歳年上である。

3

蛇柱・伊黒小芭内が住む、道場も兼ねた屋敷。
その道場には隊士達が至る所に四方八方迷路のように木で縛りつけられている。
理由は、怒らせた罪（甘露寺蜜璃と話した罪）、覚えない罪、手間を取らせる罪・・・などなど。伊黒の訓練は、その哀れな隊士達の間を縫って、木刀を振るい彼に当てなくてはならない。
不死川実弥との訓練の前に炭次郎達はこの難関である伊黒との訓練を終えなくてはならず、とはいえ炭次郎は数日間で終えた後・・・まだ終わりでは無かった。
今度は罪など無くとも木に縛られ他の隊士の1人が合格するまで付き合わされた。・・・時折わざと伊黒に叩かれた事もあったが。
そんな理不尽な面を覗かせる伊黒だが、同じ理不尽さでは引けを取らない不死川実弥が訪ねて来て、別室の茶室に招いた。そこは彼が頼んで造らせたものである。
茶室は俗世とは掛け離れた空間の意味もある。
伊黒は彼の忌わしき自分の一族に、自身が生まれた事自体に嫌悪感を抱いていた。一族が自分を鬼に生贄に差しだそうとした事、それを恐れ、命からがら自分が逃げ出した事で一族のほとんどが皆殺しになった事・・・
あの時どうすれば良かったのか？彼らとともに鬼に立ち向かえば良かったのか？いや、自分を生贄に出そうとした一族だ、自分が逃げた事で逆上した鬼に殺されても自業自得だ・・・そう、自分には責任などない・・・いや、だが本当にそうなのか・・・？良心と罪悪感、一族と自分が和解した上で鬼を倒せた最良の選択肢は無かったのか？という葛藤で日々を生き続けている。
そんな自分でも鬼に苦しめられている人を助けた時と、隊士達に八つ当たりしている時と、甘露寺と談笑している時が唯一その重圧を忘れられる。
鬼を全て始末したら、その時は自害を考えてはいるが、その事は誰

にも明かしてはいない。
この茶室に居る時は厳かな心持・・・伊黒が精神統一、思索、分析を巡らす時にも役だっている。
とはいえ、この間道場に縛られている隊士達はそのままである。
伊黒達、柱は当然多忙であり、今は隊士達に稽古も付ける余裕があるとはいえ、そこまで暇では無い。こうして此処来るのはそれなりに理由があるのだろうと察し、開放体正座・・・両脚を開いた彼らしい正座をしている実弥に先程点てた茶を差し出した。
薄暗い部屋内に静かに鉄瓶から湯気が立ち上り、彼がそれを飲み干すまで静寂な時が流れる。
「・・・不死川、お前ともあろう者が情けない・・・」
「・・・・・・ぐっ」
彼の耳にも入っている、冨岡と最近揉めている事。それにより隊士たちへの稽古が疎かになっている危惧（実弥の稽古は伊黒以上に地獄なので隊士達は密かに稽古を中断させてくれる冨岡への信頼度が増している・・・とはいえ、冨岡を取り逃して帰って来た時の彼の稽古は苛烈を極める）
「ふぅ・・・まったく、冨岡如きに些細な事で腹を立てるな、あのような柱としての責任を自覚しているか怪しい奴と俺達は違う。お前の好物を細工されたからどうだというのだ？これから上弦の鬼や無惨といった今までとはまるで違う鬼が相手だ。皆が団結しなくては勝てぬ・・・我を忘れ、冷静さを欠けば全滅だぞ。奴のように和を乱す者などほおっておけ」
隊士達に対してとは打って変わって、言葉はともかく威厳のある父のような佇まいで説得されると不死川も黙って項垂れるしかない。
その時、茶室の戸を叩く一人・・・一匹の、諸事伝達の鎹カラスだと察し、傍の実弥が戸を開けてやる。
「む？甘露寺の所の・・・文か・・・」
そのカラスの足についている結ばれている紙を解き、中の文章を読む。
『ぜんりゃく　いぐろさまにおかれ、ひびつづがなくごたこうにて

ぞんじそうろう。かじつ、とみおかさまがせったくにおこしになられ・・・』

漢字を書くのは苦手な為、間違わないように全て平仮名で書かれている。彼女の書いた内容を気持ちも読み解き、口語にすると・・・

『伊黒さん元気―？元気ですよね？あたしも元気です！でねでね？実はこないだ冨岡さんがうちに遊びに来たのー、きゃーどうしたんだろ？と思ってきいてみたの。それでね、炭次郎君からあたしの訓練内容聞いて、見学したいって・・・もうーはずかしーー！でね？そのやりかたではかなり時間がかかって、出来ない隊士もいるから、こういう風にやるんだって教えてくれたの・・・そしたら全部の子達が出来るようになったの、冨岡さん凄いわ―、あたし尊敬しちゃう！手取り足取り教えてくれてとっても親切だったわ、あたし考えるの苦手だからどうしても力に頼っちゃう・・・だから』

全てを読み終えない内に伊黒はその手紙を畳に叩きつけた。本当は破り捨てたかったが、甘露寺の手紙だったので出来なかった。

「おのれとみおかぁあああああ・・・・・・」

立ち上がった伊黒からは憤怒の不動明王を想起させる気迫がみちみちていて、

実弥を驚かす。

「お・・・おお・・・？」

「何を愚図愚図している、不死川！追うぞ！あいつを・・・冨岡を血祭りにしてやる・・・絶対に許さん！」

「お・・・おう・・・も、もちろんだ・・・」

実弥は、妻と子を殴った自身のロクデナシな父親の事を少しだけ思い出した。

蟲柱、胡蝶しのぶの耳にも冨岡の話は入って来ている。ただでさえ、彼の行動には心を痛めているのに更に私の心痛を増やさないで欲しい・・・。

姉の仇は是が非でも討ちたい・・・なのに、彼は・・・。

自身への毒の投与の手が鈍る・・・、こうでもしないと上弦の鬼には勝てない・・・自分の身を犠牲にするぐらいで無ければ倒せる相手ではない・・・。